

いもう 葦毛通信



クサイチゴ

2026年 7月 9日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町三丁目1
TEL : 0532-56-6060

No. 187

1、2026 年ナガバノイシモチソウ経過報告ー1

1) ナガバノイシモチソウが発芽しました！

ナガバノイシモチソウの発芽を4月22日に第1～8地点の全地点で1,050個体確認しました。今年度の初確認です。昨年は4月20日だったので、ほぼ例年並みです。あまりにも小さく双眼鏡で観察して計測していますが、一時間半ほどかかりました。また、十字



ナガバノイシモチソウ自生地（2025年5月10日） ナガバノ発芽状況（5月3日）



発芽状況拡大：（2026年4月25日、双葉の長さ約2～3mm）

に開いた葉（双葉+捕虫葉）のうち双葉の長さが2～3mmほどで、捕虫葉には先端が玉状で赤くなった細長い突起がいくつも見られ、その先には粘液が出ています（前頁下写真）。今年も昨年に続き発芽後の生長が遅いようで、全体的には昨年同様個体数が少ないように見えます。

2) 発芽実験区

全体写真（前頁上左写真）の中央に白くなった四角い区画がありますが、地表面をかつての状態に戻すために表土を2～5mmほど削った発芽実験区です。かつてのナガバノイシモチソウの自生地は小さな石が地表面に転がっている裸地でしたが、現在は粘質の土が薄く堆積しイシクラゲのような藍藻類と考えられる被膜状の黒い生物が地表面を覆うようになってきました。これが覆ったところでは、ナガバノイシモチソウが発芽できなくなって衰退してしまいます。

発芽実験区―1は第1地点の中央に設置しました。第1地点はナガバノイシモチソウ自生地の中でも最も多くの花が咲いたところで、2020年には3,239輪が開花しましたが、2025年は454輪となり、開花数は2020年の約14%まで減少しました。自生個体数も2020年は8,372個体でしたが、2025年には1,116個体となり、個体数も2020年の約14%に減少しました。減少した原因は分かりませんが、小石が地表面を転がっていたかつての地表面に戻せば、そこに残っていた埋土種子から再生する可能性があると考えて実験を行いました。

粘質土（表土）は2～5mmという非常に薄い地層でしたが、剥ぎ取ると小石が多く現われかつての地表面の状態に戻すことができました。



発芽実験区1（2026年5月27日） 部分拡大（左黒色部は区外：右灰色部は区内）



発芽状態（実験区内―1・2）

発芽状態（実験区との境界付近―3）

しかし、表土を剥ぎ取った実験区内からは、ナガバノイシモチソウの発芽はごく僅かでした。写真は上左・中2点が実験区内、上右1点が実験区との境界付近の実験区外です。実験区内からはわずかに発芽したのみですが、実験区外の表土からは一定数のナガバノイシモチソウが発芽しました。

実験から分かったことは、旧地表面にはナガバノイシモチソウの種子は残っていない可能性が高く、通常の土壌シードバンクを形成しておらず、地表面にあるだけの状態であると考えられます。これは、ナガバノイシモチソウの種子が地表面にしかなく、この状態を「**膜状シードバンク**」として認識していたこれまでの考え方を裏付けることになりました。

2) ナガバノイシモチソウが**開花**しました！

5月下旬にはトウカイコモウセンゴケが、6月初旬にはネジバナが開花し始めました。ナガバノイシモチソウは昨年より5日早い6月10日に初開花を確認しました。

ナガバノイシモチソウは、例年6月初旬に開花し始め、7～8月頃に開花のピークを迎え、連日多くの花を咲かせます。9月になると開花数が少なくなって開花数は増減を繰り返し、10月にはさらに少なく半開状態になり、11月には開花しなくなります。ほぼ、5か月間に亘って開花し続ける花ですが、その開花パターンは6～8月に連日多くの花を咲かせ続ける最盛期と9・10月の増減を繰り返す減退期に分けられるようです。



ナガバノイシモチソウ開花状況（2026年6月10日）

花拡大

2、ナガバノイシモチソウ一般公開

- 1 開催日時 7月31日～8月2日（金～日）9:30～11:30
- 2 集合場所 幸公園北西隅駐車場（佐藤町字池下）
- 3 参加申込 現地受付（事前申し込み不要）
- 4 問い合わせ 豊橋市文化財センター（☎0532-56-6060）

ナガバノイシモチソウはモウセンゴケ科の食虫植物で、赤花のナガバノイシモチソウは豊橋市と豊明市の2か所しか自生していません。日本固有種とされているので、地球上でこの2か所しか自生地がない貴重な植物です。

開花期は6～10月頃で、8月に開花のピークを迎える一日花です。太陽が昇ると開花し、12時ころには閉じてしまうので、実際には半日（午前中）しか咲きません。指定地はフェンスで囲まれています。年1回一般公開をしています。この機会にぜひご覧ください。



一般公開の様子（2025年8月1日）

3、マダニの脅威

近年、葦毛湿原でもマダニが増えています。中央広場にある説明看板に資料掲示用のガラスケースが設置してありますが、ケース内にマダニがいました。日本最大級の大きさの**タカサゴキララマダニ**

(右写真)で、体長は5mmほどで吸血すると20mmほどになるようです。

屋外でイノシシの解体を見たことがありますが、イノシシが死ぬと吸血していたマダニは体から離れるようで、イノシシから逃げ出した十分に吸血した大きなマダニを見て驚いたことがあります。

タカサゴキララマダニはガラスケースの中で見えるように、セロテープで3重に貼り付けましたが、1週間ほどで脱出しているのを見つけました。逃げられないように厳重にセロテープで張り付けたつもりでしたが、難なく抜け出していました。葦毛湿原では、近年ニホンイノシシやニホンジカが増えており、これらの動物により葦毛湿原内に持ち込まれたものと思われます。

マダニは体内にウィルスを持っている場合があります、咬まれると重症熱性血小板減少症候群（SFTS）を発症して死に至る場合があります。葦毛湿原周辺では死者が出たということは聞いたことがありませんが、駐車場から湿原に至る自然歩道上にもマダニは多くいます。湿原内はペット連れ禁止です。マダニにとってペットは格好の吸血対象なので、マダニを自宅に持ち帰ることになります。ペットは連れてこないで下さい。



**タカサゴキララマダニ：吸血前の状態
約10倍に拡大（2026年4月25日）**

4、ヒメヒカゲの羽化とパトロール

今年もヒメヒカゲが羽化し、5月20日に初めての個体を1頭確認しました。その後順調に数が増え、6月1日には29頭になりました。しかし、6月2日には台風6号が愛知県に接近し、天候不順が続く確認数は伸び悩んでいました。6月12日には32頭が確認でき最高値になりましたが、葦毛湿原のヒメヒカゲは絶滅を心配する状態が続いています。

このような状況下で、葦毛湿原ではヒメヒカゲのシーズンに捕虫網を持った人が2018・23年に確認されています。今年は5月27日に指定地西側の広場で捕虫網を振っている人がいて、葦毛湿原調査員が葦毛湿原内は採取禁止であることを告げても無視して網を振っていたそうです。

葦毛湿原ではヒメヒカゲのシーズンには**パトロール**を行っており、豊橋警察署とも相談の上、密猟者が確認されたら直ちに**警察に通報する体制**が整っています。



防鹿ネットのヒメヒカゲ♂+♀（2026年6月4日）